



日本アスレティックトレーニング学会

News Letter 第10号

発行:2021年5月31日

No. 10 掲載内容

1. 令和3年度代表理事所信	2
2. 各委員会からのお知らせ	3
3. 会員紹介	4
編集後記	6

1. 令和3年度代表理事所信

アスレティックトレーニング学の社会貢献に向けて

代表理事: 広瀬 統一(早稲田大学)



本学会会員の皆さまにおかれましては、未だ収束をみないコロナ禍のなかで、日々の研究・教育・支援活動に際して平時よりもご多忙の日々を送られているものと拝察いたします。特にスポーツ現場での活動については、様々な制限や目まぐるしい状況変化に対応することが求められ、スポーツ活動の安全と安心を支援する上で多くのご苦勞をなさっているものと思います。そのような状況下での活動において、会員の皆さまがその時々の最適解を導くために生かせるような情報提供を、本学会では引き続きウェビナーや学会誌を通じて行っている所存です。

また、本学会は2022年度に設立10周年を迎えます。記念すべき年を迎えるにあたり、今年度は改めて本学会の活動を見つめ直していきたいと考えております。本学会が設立時から掲げているミッションは以下の通りです。

「アスレティックトレーナーが関わる全ての領域の科学研究とその発展に寄与するとともに、会員相互の連携と情報交換を促進し、あわせて内外の関係機関との交流を図ることによって、アスレティックトレーニング学の普及・発展に寄与することをめざします。」

アスレティックトレーニング学を普及・発展させるためにはこの学問が社会に貢献できていることが前提となります。私たち自身が掲げたミッションが適切に行われているか、そして社会に貢献できているかを自問しながら、皆でアスレティックトレーニング学を発展させていけるように活動をしていきたいと考えております。

2. 日本アスレティックトレーニング学会委員会よりお知らせ

将来構想委員会

アスレティックトレーニング関連用語解説集の公開

5月の本会ホームページリニューアルと同時に、アスレティックトレーニング関連用語解説集が公開されることになりました。初回は32語を公開いたします。多くの方にご活用いただけることを願っております。

第10回日本アスレティックトレーニング学会学術大会のお知らせ

第10回日本アスレティックトレーニング学会学術大会は、「社会におけるアスレティックトレーニング学の位置づけと貢献可能性」をテーマに、スポーツ現場での活動や学術活動に応用できる知見を意識したシンポジウム、教育講演、クリニカルセミナー、学術セミナーを企画しております。さらには、第10回学術大会記念プログラムとして、日本アスレティックトレーニング学会のこれまでの歩みを振り返る「記念式典」も行います。多くの皆様方のご参加をお待ちしています。

事前参加登録を2021年7月1日から開始する予定です。今後、本学術大会の詳細は第10回日本アスレティックトレーニング学会学術大会 Web サイトにてご確認ください。

■ 第10回日本アスレティックトレーニング学会学術大会 Web サイト

<https://confit.atlas.jp/guide/event/jsatconference2021/top>

第10回日本アスレティックトレーニング学会学術大会

大会長	広瀬 統一	(早稲田大学)
副大会長	山本 利春	(国際武道大学)
実行委員長	砂川 憲彦	(帝京平成大学)
副実行委員長	倉持 梨恵子	(中京大学)

大会事務局

〒164-8530 東京都中野区中野 4-21-2
帝京平成大学中野キャンパス内(担当:大垣亮)
E-Mail: jsat2021@gmail.com

3. アスレティックトレーニング学会員の活動報告

Profile No.4



氏名： 島田 結依 / JSPO-AT (2016 年取得)

所属： 東京有明医療大学

主な活動拠点：

日本女子体育大学(バスケットボール部)、IBM BIG BLUE (アメリカンフットボール)、国立スポーツ科学センター(ハイパフォーマンス・ジム非常勤職員)、東京有明医療大学(研究生)

—現在のお仕事やアスレティックトレーナーとしての活動内容・得意とされていることについて教えてください。

日本女子体育大学バスケットボール部では、アスレティックトレーナーとして週に 1~2 回活動を行っています。毎日現場に行けるわけではないため、選手が自分自身の身体の変化に気づけるようなセルフチェックを導入しており、現場へ行った際にはその情報をもとにセルフケア指導やアスレティックリハビリテーションおよびトレーニング指導を行っています。毎日選手と接している学生スタッフへの指導も行い、協力してもらいながら、私自身が現場に行けなくても正しい情報が入るような工夫をしています。また、バスケットボールは、膝前十字靭帯損傷(ACL 損傷)、足関節捻挫の発生が多い競技であるため、その予防には特に力を入れて指導しています。全体のウォーミングアップに予防プログラムを入れて実施していますが、ウォーミングアップの前にも個人でできる予防プログラムも取り入れてもらい、各選手で必要なセルフケアができるようにアプローチしています。

アメリカンフットボールチームの IBM BIG BLUE とは今年に入り契約し、週に 2 回、アシスタントアスレティックトレーナーとして活動しています。アスレティックリハビリテーションの指導が主な役割ですが、柔道整復師の免許を所有しているため、治療や脱臼の整復を含む応急処置も必要に応じて行っています。

国立スポーツ科学センターでは、ハイパフォーマンス・ジムの非常勤職員として週に 3~4 回、受付業務や雑務を行っており、選手サポートにも入らせてもらっています。東京有明医療大学では、研究生として在籍しております。ともに、トレーナー活動がメインとなる場ではありませんが、アスレティックトレーナーとは違う視点を持つことで活動の幅が増えていると思います。また、様々な場所で活動することによって各活動現場で活かすことのできる情報がないか、常にアンテナを張ることを意識しています。

アスレティックトレーナーは個人の背景により多少異なりますが、コンディショニングや治療、リコンディショニング、トレーニング指導など、様々な役割を担うと思います。しかし、自分一人では選手が望むサポートを行うことは難しいと感じているため、他業種との連携を大切にすることを意識しています。特に、外傷・障害発生から競技復帰までは、ドクターや理学療法士、ストレングス&コンディショニングコーチなどとの連携が大切になってくると思いますので、お互いに信頼できる関係を築けるよう努力しています。

—現場活動において「研究」を活用した事例／「科学的アプローチ」の経験があれば教えてください。

私がサポートしている競技では、ACL 損傷と足関節捻挫が多く発生するため、その予防に関する情

報はいち早く収集できるよう論文などをチェックしています。これらの傷害は競技動作中に多く発生するため、競技中の動作特性を把握することが重要であると考えています。そのため研究では加速度センサーを用いて基本動作や競技動作の負荷の定量化に取り組んでおり、現在サポートしているチームにおいても、トレーナー活動内容の改善に活かしています。

また、外傷・障害の発生や悪化を防ぐため、選手のコンディションを毎回確認し、早めの対策を心掛けています。昨シーズンは新型コロナウイルス感染症の影響による活動制限もあり、練習ができない期間もありました。論文や学会等でディトレーニングの影響や競技再開時の受傷リスクの増加が報告されていたので、それらの情報を参考に活動制限期間のトレーニングや練習再開時の段階的復帰について監督、コーチと連携しながら調整を行いました。その結果、昨シーズン開始時のコンディション調査ではこれまでの調査結果と比べて、最も良い状態でシーズンに入ることができ、競技結果にも繋がりました。

—ご自身の活動現場で解決を模索していること、もしくは、アスレティックトレーニング領域のなかで新たにチャレンジしている問題や課題があれば教えてください。

現場で活動する中で、最近特に頭を悩ませているのは、競技スキルは高いものの、受傷リスクの高い競技動作（例えば切り返しにおける knee-in toe-out）を呈する新入生へのアプローチです。チームからすると、戦力としてその選手は必要であり、当然、選手本人も試合に出たい気持ちが強いいため、その選手を試合に出さない選択肢は基本的にはありません。しかし、明らかに受傷リスクの高い動作のまま試合に出し続けることが果たして良いのかと、私自身がアスレティックトレーナーの立場で葛藤しています。受傷リスクを回避するステップやターンにおける脚の使い方を大幅に修正すること

は、一時的な競技レベルの低下を招きかねないため、競技レベルを高い状態に維持するという側面から見ればその選択もリスクになります。もしかすると、動作を改善しなくてもケガなく高い競技レベルを維持することができる可能性もあるわけです。しかし、ケガをしてから「やっぱりだめだったか」では、選手のケガを予防することが業務のアスレティックトレーナーという立場として、責任ある仕事をしたことになるのかと考えてしまいます。現在は、状況をコーチに説明し、理解を得ながら、そのような選手がいた場合、まずは正しい競技動作を身につけるためのトレーニングに重きを置いた対応をさせて頂いています。この方法が正解かはまだはっきりと分かりませんが、今後も選手にとって本当に必要なことを考えて活動していきたいと思います。

—アスレティックトレーナーとして、今後やってみたいことを教えてください。

日本女子体育大学も IBM BIG BLUE も、フルタイムで選手のサポートができない状況は同じです。このように限られた環境下で私は、「セルフチェック」の重要性を感じております。「セルフチェック」を導入することで選手が自身の身体の状態を知り、「身体の変化」についてアスレティックトレーナーである私と意見交換してくれるようになり、会話する機会が増えた選手が多くいます。私も選手からの身体の状態についての会話をヒントにコンディショニングについてアドバイスを行うことができますし、より良い情報を選手へ提供できるようになっていると感じます。

しかし、多くの選手の情報を一度に知るためには、別の方法も必要であると感じています。その1つとして、活動制限がある中でも大人数に対して継続的な測定ができる方法を模索し、コンディションの変化を客観的に追っていきたいと考えています。そして競技に必要な体力要素や動作特性を数値化し、客観的指標としてコンディションをチェックしていくことができれば、多くの選手に対して「ケガか

ら守る」、「ケガからの早期復帰」さらに「再受傷の予防」に少しでも役に立つのではないかと考えています。また、現在は新型コロナウイルス感染症が、身体のみならず心理的なコンディションへ及ぼす影響も大きいと感じています。感染症が拡大する以前と現在のコンディションの違いについてもヒアリングなどを行い、比較することで、この状況を乗り

切るヒントが得られるのではないかと考えています。



編集後記

日本アスレティックトレーニング学会 News Letter 第 10 号をお読みいただきありがとうございました。今回は、2021 年度の代表理事の所信原稿および各委員会からの情報提供を掲載させていただきました。

また、広報委員会としての定期企画である会員紹介第 4 回では、日本女子体育大学バスケットボール部やアメリカンフットボール IBM BIG BLUE などでご活躍の島田結依先生をご紹介させていただきました。

News Letter も第 10 号まで発行にこぎつけました。今年度は年間 4 回の発行を目指し準備していきます。

今後も学会員の皆様に、より身近で情報収集しやすい媒体を目指して広報委員会一同精進していく所存です。変わらぬ当会活動へのご理解・ご協力をよろしくお願いいたします。次号は 2021 年 8 月末日の発行予定です。

(広報委員会 News Letter 担当: 田口暢秀)

日本アスレティックトレーニング学会 News Letter 第 10 号 2021 年 5 月 31 日発行

編集: 日本アスレティックトレーニング学会広報委員会

News Letter 担当 田口 暢秀、佐々木 さはら、久保誠司、津賀裕喜

片寄正樹(担当理事)、岩本紗由美(委員長)

発行: 一般社団法人日本アスレティックトレーニング学会

事務局住所 〒116-0011 東京都荒川区西尾久7丁目 12-16 創文印刷工業株式会社内

電話 03-3893-0111 FAX 03-3893-6611

E-mail: jimujsat@soubun.com URL: <http://www.js-at.jp>
